

外部評価委員会 評価結果報告書

平成24年5月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
(東京都健康長寿医療センター研究所)

まえがき

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究所は、東京都老人総合研究所と東京都老人医療センターとを一体化することにより、病院部門における重点医療に寄与する研究の実施や、老年学・老年医学研究の推進を通じて、高齢者の健康増進・医療・介護の諸問題に包括的に取り組み、最新の科学的成果の社会還元を進める研究を進めてきました。本年は、第1期中期目標に基づく中期計画の3年目にあたります。

研究所の研究体制は、自然科学系と社会科学系の2系に分かれており、自然科学系は、老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老年病研究チーム、老年病理学研究チーム及び神経画像研究チームの5チームで構成されています。また社会科学系は、社会参加と地域保健研究チーム、自立促進と介護予防研究チーム及び福祉と生活ケア研究チームの3チームで構成されています。それぞれの研究チームの第1期中期計画3年目の研究計画と成果について、外部評価委員による専門的な見地からの評価をお願いしました。

委員の皆様方には、大変ご多忙な中、研究所の今後のために貴重なご意見やご助言を賜り、心から感謝申し上げます。

いただきましたご意見やご助言を踏まえ、意識及び組織改革の努力を一層積み上げ、第2期中期目標及び中期計画の策定の中で、研究の方向性を検討し、研究を進めていく所存です。

都民の皆様、関連する研究者の皆様には、今後とも当研究所の活動にご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
(東京都健康長寿医療センター研究所)
センター長 井藤英喜

外部評価委員会の実施状況

○自然科学系

平成24年3月29日（木）

午後2時00分から

○社会科学系

平成24年3月26日（月）

午後1時30分から

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会 委員名簿

自然科学系研究外部評価委員会

区分	氏名	所属・役職名
学識経験者	新井 平伊 あらい へいい	順天堂大学医学部・大学院医学研究科教授
	石井 直明 いしい なおあき	東海大学 医学部 専任教授
	下門 順太郎 しもかど けんたろう	東京医科歯科大学大学院・医歯学総合研究科血流制御内科学分野教授
都民代表	小島 正美 こじま まさみ	毎日新聞社 生活報道部 編集委員
行政関係者	高木 真一 たかぎ しんいち	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

社会科学系研究外部評価委員会

区分	氏名	所属
学識経験者	太田 喜久子 おおた きくこ	慶應義塾大学 看護医療学部 部長
	長田 久雄 おさだ ひさお	桜美林大学大学院 老年学研究科 教授
	安村 誠司 やすむら せいじ	福島県立医科大学 医学部 公衆衛生学講座 教授
都民代表	本田 麻由美 ほんだ まゆみ	読売新聞 東京本社 編集局 社会保障部記者
行政関係者	高木 真一 たかぎ しんいち	東京都福祉保健局 施設調整担当部長

外部評価委員会 評定総括表

【各5点満点】

「自然科学系」… 丸山直記(副所長)

順位	チーム名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	3	1	1	
5	老化機構研究チーム (遠藤 玉夫)	4.4	4.2	3.2	4.2	4.06
3	老化制御研究チーム (田中 雅嗣)	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
4	老年病研究チーム (重本 和宏)	4.6	4.2	3.8	3.8	4.13
2	老年病理学研究チーム (沢辺 元司)	4.6	4.4	4	4.4	4.36
1	神経画像研究チーム (石渡 喜一)	4.6	4.8	4.2	4.6	4.63

「社会科学系」… 高橋龍太郎(副所長)

順位	チーム名 (リーダー名)	1. 研究計画 の創造性・ 妥当性	2. 研究成果	3. 研究成果 の還元	4. 今後の展 望と発展性	総合評価
評価ウェイト		1	2	2	1	
2	社会参加と地域保健研究チーム (新開 省二)	3.8	3.8	3.4	3.8	3.66
1	自立促進と介護予防研究チーム (栗田 主一)	4	4.2	3.8	4	4
3	福祉と生活ケア研究チーム (石崎 達郎)	3.6	3.8	3	3.6	3.46

自然科学系(A系)報告

東京都健康長寿医療センター研究所（自然科学系）の外部評価報告について

自然科学系 外部評価委員会

委員長 下門 順太郎

東京都健康長寿医療センター研究所における自然科学系の老化機構研究チーム、老化制御研究チーム、老年病研究チーム、老年病理学研究チーム、神経画像研究チームの5チームについて、事前に提出された研究報告書と当日のプレゼンテーションを基に評価を行った。評価に当たっては各評価委員が、あらかじめ定められた評価項目及び評価視点につきコメントを付した評価を行った。また委員長が全体の意見の取りまとめを行った。

全般的な事項

中期計画の年度の進行により、各チームとも着実に成果を挙げているが、もっとも評価できる点は、研究所全体の研究の目的・方針が徹底され、それに沿った研究が実施され成果があがっていることである。研究体制の不断の見直しを図る取り組み、認知症や運動機能という2つの重点疾患についてすべてのチームが異なる視点・研究手段を持って研究すること、また実用化を目指した東京バイオマーカー・イノベーション技術研究組合の設立など枠組みが整備されたことにより、各チームとも、研究所の目的に合った形のユニークな研究が計画され実施されるようになり、チーム間の協力も外部から判かりやすい形で実施されるようになった。

他方、素晴らしい成果が得られているにもかかわらず都民に十分広報されていないことはこれまでも指摘されてきたが、本年度もあまり改善が得られていなかった。国立の研究センターが実施しているような定期的なマスコミ向けのセミナー開催や、広報のプロを雇って都民向けの広報活動を企画するなど、この方面での体制整備も重要であると思われる。

超高齢者社会の到来にともない、本邦で最も伝統のある老年学の研究施設である本研究所への期待は大きく、長期的展望に立ったスケールの大きな研究を実施するように希望する意見が多かった。

個別のチームに対する評価

①老化機構研究チーム

本チームは老化に関する最も基礎的な研究を行っているが、老化機構、認知症、運動機能など他のグループと共にテーマに焦点を当て研究をおこなうことで研究所全体の研究の基盤となりその質を向上させている点で高く評価できる。糖鎖やマイクロRNAの網羅的検索や酸化ストレスに関する研究など当研究所ならではの研究がおこなわれ成果が得られている。

②老化制御研究チーム

本チームは老化機構チームより実用化に近い立場で研究を行い、ビタミンC、ロイヤルゼリー、水素分子、PDE3など、老化、認知症の予防治療につながる研究成果を得ている。今後は、臨床材料を用いての高齢者の疾患や健康長寿に関する多重オミックスの統合が極めて重要な研究になってくるものと思われる。オミックス研究から得られた結果を、他のチームとも共同して分子メカニズムの解明につなげることが期待される。

③老年病研究チーム

臨床に直結した研究チームで、高齢者の疾患の治療に直接結び付く研究を行っている。一般臨床医や都民からもっと理解されやすくまた今後の発展が期待される分野である。それぞれのグループがそれぞれの成果を上げているにもかかわらず、アプローチが全く異なっており、チーム全体としての役割や成果が見えにくくなっている。組織の拡充整備を進め、研究所の研究成果を臨床に橋渡しをする役割を果たすことを目指してほしい。

④老年病理学研究チーム

Geriatric EWAS、病理解剖バイオバンク、高齢者ブレインバンクなど、本研究所ならではのバンク事業や、アミロイドペット国際治験、J-ADNI臨床研究など本研究所の強みを生かした共同研究が成果をあげている。テロメア短縮と加齢や癌発症の関係、Lp(a)や各種疾患におけるエストロゲンの役割など、バンク事業・共同研究以外の研究においても優れた成果が得られている。今後も当研究所が国内外のこの分野の研究に貢献していく上で中心的役割を果たすチームと思われる。

⑤神経画像研究チーム

認知症診断のためのアミロイドイメージングの意義の確立、脳画像データベース構築、あらたな診断薬の確立など実用的な認知症診断に焦点を絞った研究が、効率よく遂行されている。研究中の診断法を確立するとともに、他チームの研究成果を利用した新たな認知症早期診断法の開発を目指してほしい。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老化機構研究チーム

チームリーダー：遠藤玉夫

各委員の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	5 総合評価
平均点	4.4	4.2	3.2	4.2	4.06

5点×3名
4点×1名
3点×1名

5点×3名
3点×2名

4点×1名
3点×4名

5点×2名
4点×2名
3点×1名

5チーム中 5位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均4.4点

- 重要な老化研究、とくに糖鎖解析では独創性が感じられた。
- 運動中に生理学的に発生する活性酸素を捉える独自の技術開発がおこなわれている。
- 老化研究におけるプロテオーム解析では独創的な解析方法である。
- 重点医療関連研究など研究所全体の枠組みに合わせて、研究テーマがよく整理されており、その中で、老化のメカニズムに関するユニークな研究が計画されていた。認知症や超百寿と関連する糖鎖やマイクロRNAの関与などユニークな研究が計画された。
- 老化メカニズムの研究はどれもすぐれています。酸化ストレスとエネルギーの代謝解明、活性酸素の生成は活動一休止期で亢進するなど先進的な研究が多い。
- 他大学や他チームとの連携も評価できる。
- 基礎的な研究で一般的には理解しにくい点もあるが、アルツハイマー病の新たな治療及び予防法の開発を目指すなど、重要な研究分野である。

2 研究成果

平均4.2点

- それぞれこの1年で大きく前進したと感じられた。
- 着実な研究成果がえられている。とりわけ老化マウスモデルにおける糖鎖異常や超百寿者の長寿マーカーとしてのレクチンアレイを利用した研究は、これまでの当研究所の成果を、老化研究に応用してもので独創性に富み高く評価できる。miRや分子状水素を実際のアルツハイマー病との関連で研究するなど、焦点が絞られた研究成果がえられている。
- プロテオーム、老化のバイオマーカー研究ですばらしい成果が出ている。
- 超百寿者の長寿マーカーの研究も興味深い。
- 現中期計画に対しては、ほぼ予定通りの進捗状況であるようだ。

評点の理由、コメント

●老化機構研究チーム

3 研究成果の還元

平均3. 2点

- ・認知症における糖鎖解析、Klothoにおける糖鎖解析、酸化ストレスにおける標的分子解析、百寿者における健康長寿マーカーの解析、運動時に発生する生理学的な活性酸素の解析など、多くの研究成果が上がっています。
- ・研究の性格上 行政への貢献は大きくないが、独創的な創薬シーズとし産業への貢献は大きいと思われる。
- ・研究自体はどれもすばらしいが、そのことが一般の人にあまり知られていないのがとても残念である。もつと積極的にメディアにアクセスするなど研究の有用性を都民に訴えていく還元策に工夫が必要に思われる。
- ・研究成果がどう還元されていくのか、素人にも分かるように伝え方に配慮を望む。

4 今後の展望と発展性

平均4. 2点

- ・認知症における糖鎖解析、Klothoにおける糖鎖解析、酸化ストレスにおける標的分子解析、百寿者における健康長寿マーカーの解析、運動時に発生する生理学的な活性酸素の解析などの成果の最終結果が楽しみ。
- ・他グループでも利用されている超百寿者や老化モデルをもじいて、複数のグループが異なる手法で研究するというアプローチは人員や予算が限られておりかつ、都民の理解が得られるような成果が求めらる研究所としては素晴らしい戦略であると思われる。老化研究に焦点が合ってきた糖鎖の役割、miRの網羅的研究、酸化ストレスなどの研究は今後もぜひ継続発展させるべきテーマと思われる。
- ・一連の研究はすぐれているが、今後それらがどのように社会に役立つかの道筋が明確に見えない。各種研究に重み付けを行い、展望のありそうな研究をもっとしづり込むことも必要ではないかと思う。
- ・今後の展望について、「将来トランスレーショナルリサーチの重要なシードとなることが期待され、社会科学系研究チームと協力して医療現場や都民への研究成果の還元を図る。」としているが、まさにそうなる事を期待している。

5 総合評価

平均4. 06点

- ・部門として、地味な分野にならざるを得ないが、役割をきちんとこなしているとの印象を受けた。発展性の評価は、projectとしての成果の中で成されるべきであり、その意味で、今後への発展が期待できる。
 - ・良くまとまった、明快なプレゼンテーションでした。
 - ・最終結果が楽しみなほど、有益なデータが出始めたと感じました。
 - ・見つかってきたマーカーなどの機能的役割や分子メカニズムまで行きつくことを期待します。
- これまで学問的にすぐれていても老化の関係が明確でない面もあったが、今年度は研究所全体の研究目標に即して焦点の合った研究が行われ成果が得られたと評価できる。他グループと共に材料を用いて、老化機構、認知症、運動機能に関して異なる手法で研究することは今後も大きな成果が期待できる。
- ・素晴らしい研究を行っているのが、今ひとつ届いてこない。要は伝え方の問題だと思う。都民にどう伝えるのか、考えて欲しい。

6 評価を終えて

・超百寿者に関する健康長寿マーカーの探索は、若者、老齢者、超百寿者の比較では、原因と結果が永遠に分からず。それを知るには同じ人を加齢とともに追跡していくことが重要であり、長期研究が可能な東京都健康長寿医療センターに期待します。そのため、ここに多くの予算をつぎ込んでも良いと思います。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老化制御研究チーム

チームリーダー：田中雅嗣

各委員の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	5 総合評価
平均点	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
	5点×2名 4点×2名 3点×1名	5点×1名 4点×4名	5点×1名 4点×4名	5点×1名 4点×4名	

5チーム中 3位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均4.2点

- ・独創的・新規性という面で説得力が足りなかつたと感じた。
- ・他チームとの連携が良くなってきたと思う。
- ・重点医療関連研究など研究所全体の枠組みに合わせて、老化機構グループより臨床応用に近い研究テーマがよく整理された形で計画されている。
- ・ミトコンドリア病の遺伝子診断、老化促進モデルマウスのエクソン解析など老化促進の遺伝子解析研究は先進的で優れている。記憶の改善薬、Aβを介した認知症発症の研究もすばらしい。他チーム、他大学との連携も充実している。
- ・「老化メカニズムを基礎的研究によって解明し、それらの老化過程を積極的に制御する手段を開発する。」ことで、高齢者の健康増進、健康長寿の実現を目指してほしい。

2 研究成果

平均4.2点

- ・ロイヤルゼリーの研究、ビタミンCの研究、皮膚刺激の研究など人に結び付く老化の研究に成果が見られた。
- ・ミトコンドリア研究はミトコンドリア病に焦点が当たり過ぎて、老化研究での成果が薄れていた。
- ・老化促進マウスの研究も人の老化研究にどのように貢献できるのかという焦点が薄れていた。
- ・研究が進行し 成果が得られてきているが、多重オミックスに関しては研究が進行している段階で今後の成果が期待される。
- ・健康長寿ゲノムの探索研究での成果は着々と進み、年々成果をあげており、目標達成度も高い。線虫を用いたローヤルゼリーの研究、ビタミンC不足による病態解明の成果も興味深い。
- ・血漿ビタミンC濃度の調査結果に興味を持った。
- ・皮膚のローリング刺激の効果についても、臨床研究を開始したとのことでその結果に期待する。

評点の理由、コメント

●老化制御研究チーム

3 研究成果の還元

平均4.2点

- ・行政・地域・産業への貢献が期待できる研究も多くなってきたが、それよりも分子メカニズムの解明など、研究の世界に貢献できることが重要である。
- ・ロイヤルゼリー中の抗加齢物質の同定、ミトコンドリア病の検索法、ビタミンCの測定や高齢者の機能との関係、皮膚刺激による高齢者の失禁予防、水素分子を利用した抗加齢など実用化に向けた研究成果が得られている。
- ・大学や自治体での講義、マスコミ向けセミナー、市民講座など積極性が感じられる。社会に成果を還元しようとする意欲も他に比べて高いように感じる。
- ・ビタミンCの効果を、介護予防などの取組の中でも活かしてほしい。
- ・皮膚のローリング刺激による排尿収縮抑制が、夜間頻尿に対し効果が上がるなどを期待する。

4 今後の展望と発展性

平均4.2点

- ・老齢マウスの行動解析は難しいが、ぜひ来年度には確立して欲しい。
- ・線虫の研究は去年と今年と異なるので、長期的な観点に立った研究計画を立てて欲しい。
- ・線虫、水素分子、老化再生などの研究は分子メカニズムの解明まで行って欲しい。
- ・当研究所ならではの臨床材料を用いて、高齢者の疾患や健康長寿に関する多重オミックスの統合は極めて重要な研究である。
- ・抗酸化物質や皮膚刺激による自律神経系の制御、水素分子によるホルミシス効果など実用化に向けた将来性が期待できそうに思う。
- ・高齢者が少しでも快適な生活を送れるよう、それぞれの研究の発展に期待する。

5 総合評価

平均4.2点

- ・人への応用など他との連携も上手く動き始めたと感じました。
- ・成果は上がっているものの、分子メカニズムの解明まで行きつくかどうかが多少疑問です。
- ・老化促進マウスで見られる変異のそれが老化や疾患にどのように関与するかを明確にするために、的を絞ることも重要と考えます。
- ・長期研究が可能なのですから、研究所独自の老化モデル動物を作成するくらいの意気込みが欲しいです。
- ・このグループの研究では、ビタミンC、ロイヤルゼリー、水素分子、PDE3など老化、認知症の予防治療に応用できる実用的な研究成果が得られている。今後は、当研究所ならではの材料を用いた多重オミックスの統合が重要なテーマとなると思われる。
- ・興味を抱きやすい研究成果があり、どう活用されるのか期待する。

6 評価を終えて

- ・人への応用は重要ですが、基礎研究がしっかりとしてこそ多大な貢献に結びつきますので、基礎研究のさらなる充実を望みます。
- ・この中で一つでも老化の分子メカニズムが解明されることを期待します。
- ・研究所にしかできない、表現形から分子レベルまで、実験動物から人までのよう、長期的な老化研究を望みます。(論文を一つ書いて終わりでは研究所で研究をしている意味がありません。)
- ・行政・地域・産業への貢献が期待できる研究も多くなってきていますが、それ以上に、この研究チームは分子メカニズムの解明など、基礎老化研究で世界的に貢献できることが重要であると考えます。ヒトにすぐに結び付かないからと、研究費を減額するのは反対です。なぜなら今のヒトの抗加齢などで注目されている、カロリー制限や抗酸化などは実験動物の基礎研究が基になっており、社会に大きな貢献が見られるからです。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病研究チーム

チームリーダー：重本和宏

各委員の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	5 総合評価
平均点	4.6	4.2	3.8	3.8	4.13
	5点×3名 4点×2名 2点×1名	5点×3名 4点×1名 3点×1名	4点×4名 3点×1名	5点×1名 4点×2名 3点×2名	

5チーム中 4位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均4.6点

- ・独創的な研究が多い。
- ・外部との連携が密で、行政への働きかけも活発。
- ・血管医学、高齢者の生活習慣病、運動器医学と高齢者の臨床医学と直結するテーマを選び研究室で得られた結果を臨床に応用する、あるいは臨床で得られた所見から基礎研究を発展させるというアプローチで優れた研究計画が策定されている。
- ・心疾患の前臨床研究、骨粗しょう症の遺伝子多型、筋と運動神経の相互メカニズムの研究、羊膜間葉系幹細胞の移植など、どれも先進的で、社会の必要性に応えるすばらしい研究が多い。
- ・チーム内、研究所内、所外研究グループ等と多くの共同研究を実施している。
- ・高齢者疾患の発症機構を解明することで、高齢者の健康増進や健康長寿への取組を推進して欲しい。

2 研究成果

平均4.2点

- ・血管医学研究については、平成23年度の成果としては、少ない印象を受けた。生活習慣病研究については、骨脆弱化とSNPの相関研究は、机上の分析のみで可能であるので、一年間の成果としては少ない。いずれにしても、共同研究が多い印象を受けた。
- ・虚血モデルの幹細胞移植、新規骨粗鬆症関連遺伝子の探索、神経筋シナプスの研究、MusColorマウスの開発、骨粗鬆症の発症メカニズムなどで成果が上がっている。
- ・血管医学では再生医療の実現に向けて全国レベルの共同研究の一員として、システムの構築に参画している。生活習慣病に関しては骨粗鬆症に関する新規遺伝子を同定し、基礎的なメカニズムや臨床上での意義について研究が進歩した。サルコペニアに関しても、今後の研究の強力なツールとなる異なる筋線維を生体で可視化するモデルの作成に成功するなどの成果をあげている。
- ・着々と成果をあげている印象をもつ。骨粗しょう症のSNPを組み合わせた骨折リスク予測アルゴリズムは大きな成果であり、重症筋無力症のマウス疾患モデルを使った研究も今後に期待できる。
- ・骨粗鬆症リスクSNPを2種類組み合わせた、骨折リスク予測アルゴリズムを完成させた。

評点の理由、コメント

●老年病研究チーム

3 研究成果の還元

平均3. 8点

- ・それぞれの研究で着実に成果が出ているが、まだ行政への貢献までには至っていない。
- ・血管医学に関しては全国規模の実用化に向けた体制作りに参画しており、評価できる。骨粗鬆症、サルコペニアに関しては今後研究成果の還元が期待される。
- ・国や外部機関との連携はうまくいっており、国へのWS難病指定の働きかけ、提言など社会還元への積極性が見られる。ただ、メディアの注目を浴びる研究が多い割には、メディアとの接点が少ない気がします。
- ・厚労省の研究事業等でその成果が活かされている。
- ・とびらの設立、運営に中核的役割を果たしている。

4 今後の展望と発展性

平均3. 8点

- ・メカニズムからヒト疾患の予防・治療法への貢献が期待できる。
- ・3つとも高齢者医学で重要なテーマであるが、社会的な体制作り、臨床と基礎研究を融合した研究、どちらかというと基礎研究とアプローチがばらばらである。サルコペニアに関する研究内容は、老化制御グループにふさわしい印象を受ける。実際の臨床に直結した研究を充実させるべきか？また老年病グループに認知症を研究する部門があつてもよいのではないかと思われる。
- ・高齢者の疾患の治療に直接結びつく研究が多いので、今後の発展に期待できる要素が多い。この分野にもっと人員と予算を増やしてもよいような気がします。
- ・サルコペニアの発症メカニズム解明に、取組んでいる。
- ・ブレインバンクとの連携も図っていく。

5 総合評価

平均4. 13点

- ・昨年の方が課題が選択され、重点的に研究されていた印象を受けた。
- ・目標通りの研究成果が得られていると考えます。
- ・臨床に直結したテーマで重要性がもっとも外から見えやすいチームである。実際には、3つのグループが全く異なるアプローチで研究を行い、グループ全体が当研究所あるいは全国の研究機関のなかで果たす役割が見えにくくなっている。
- ・科学的根拠に基づく介護予防法の確立のため、研究所内の連携そして病院部門との連携を密にし、積極的に取組んでもらいたい。

6 評価を終えて

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●老年病理学研究チーム

チームリーダー：沢辺元司

各委員の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	5 総合評価
平均点	4.6	4.4	4	4.4	4.36
	5点×3名 4点×2名 3点×1名	5点×3名 4点×1名 3点×1名	5点×2名 4点×1名 3点×2名	5点×2名 4点×3名	

5チーム中 2位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均4.6点

- ・組織バンクは存在意義、独創性ともに高く、共同研究のためにも重要である。
- ・性ホルモンの研究、アルコールによるテロメア短縮効果、神経応答の研究で独創性、新規性が感じられた。
- ・ブレインバンク、アミロイドペットによるアルツハイマー早期診断、SLSの研究は他施設との連携がしっかりしている。
- ・連携事業が多いので、外部資金も獲得しやすいと思う。
- ・血管、癌、神経に関する病理学的研究で、研究者の専門が表立っていて、神経病理を除くと研究所全体の枠組みのなかでの役割や、他部門との連携がはっきりしない。
- ・老化やアルコール症患者とテロメアの研究、がんとリポたんぱくの関連研究、線条体固有のドーパミン細胞の研究など先進性に富んだ研究はすばらしい。
- ・高齢者ブレインバンクや病理解剖バイオバンクなど、公的な研究基盤推進事業を実施している。

2 研究成果

平均4.4点

- ・性ホルモンの研究、アルコールによるテロメア短縮効果、神経応答の研究で成果が得られるようになった。
- ・そのそれぞれのグループはすぐれた業績をあげているが、全体として印象が弱い。ブレンバンク事業の活動は評価できる。
- ・老化疾患とテロメアの研究では大きな成果をあげている。ブレインバンクを通じたアルツハイマー病の新規検査薬の開発はかなりの成果だ。
- ・アルコール症患者のテロメアが、コントロールに比べ短いことを確認。
- ・高齢者ブレインバンクプロジェクトの実施。

評点の理由、コメント

●老年病理学研究チーム

3 研究成果の還元

平均4点

- ・バンクの成果は高いが、他のチーム（神経生理など）の成果及び還元は、少ない印象を受けた。
- ・ブレインバンク、アミロイドペットによるアルツハイマー早期診断、SLSの研究では行政・地域・産業への貢献が大きくなると考えるが、まだ途中段階。
- ・性ホルモンの研究、アルコールによるテロメア短縮効果、神経応答の研究は今後の貢献に期待できるが、まだ途上にある。
- ・ブレインバンク事業、J-ADNIなどの国際的協力プロジェクトの参画は、本邦では当研究ならではの貢献と思われる。
- ・興味深い研究が多い割には、その内容が一般の人々にあまり伝わっていない。もっと積極的にメディアにアクセスする必要があるような気がします。
- ・テロメア短縮と老年性疾患との関係を解明し、そのことが広報された。
- ・高齢者ブレインバンクネットワークへの参画と、その活用。

4 今後の展望と発展性

平均4.4点

- ・バンクの存在意義は高い。
- ・方向性が明確であり、本研究所でなければできない。また、リードできる研究体制作り（ブレインバンク）がますます必要であり、発展が期待できる。
- ・高齢者のリソースバンク事業の充実や、高齢者の剖検例が多い施設としてならではの新規プロジェクトの立ち上げが望まれる。研究所の他の部門との構造的な研究協力体制構築も今後の課題か。
- ・ヒトのテロメアマップの集大成には大きな期待をかけています。がんとエストロゲンの研究、ブレインバンクを通じた認知症の解明、治療薬の開発にも大きな発展性があるような気がします。
- ・高齢者ブレインバンクの参加施設が増加し、ブレインバンク事業の発展が期待される。
- ・認知症克服への貢献拡大が期待される。

評点の理由、コメント

●老年病理学研究チーム

5 総合評価

平均4.36点

- ・研究所ならではの研究が多く、発展性が期待できます。
- ・それぞれの研究のエンドポイントを示して欲しかったです。
- ・これだけ多くの高齢者を解剖する施設はわが国ではなく、国内外で発展するポテンシャルを秘めた部門と思われる。リソースバンク事業や、国際プロジェクトへの参画はさらに拡大充実させるべき。その他の研究に関しては、研究所全体の中での役割がよりわかりやすい方向に研究を展開してはいかがでしょうか。
- ・専門家の間では、健康長寿医療センターと言えばブレインバンクと言う評価がある。一方、専門家以外ではその重要性の理解がなされていない。広く理解を得る努力が、更なる充実のために必要ではないか。

6 評価を終えて

- ・東京都健康長寿医療センターの研究所らしい事業・研究が多いので、長期間に渡る研究の継続が必要です。

自然科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

程度

【各5点満点】

●神経画像研究チーム

チームリーダー：石渡喜一

各委員の評点	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	5 総合評価
平均点	4.6	4.8	4.2	4.6	4.63
	5点×3名 4点×2名	5点×4名 4点×1名	5点×2名 4点×2名 3点×1名	5点×3名 4点×2名	

5チーム中 1位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均4.6点

- ・画像解析に独創性、新規性、必要性が感じられた。
- ・他施設との連携も良好。
- ・認知症診断のためのアミロイドイメージングの意義の確立、脳画像データベース構築、あらたな診断薬の確立など実用的な認知症診断に焦点を絞った計画であり、国際的な共同研究の広がりや、実用化を念頭に置いた点、また研究所全体の研究目的と合致している点が評価できる。
- ・アミロイド集積が年齢とアポE4の遺伝子量の影響を受けたという研究、MRI・FDG-PET画像でAD発症前の疑いが分かるなどすぐれた先進的な研究が見られる。
- ・PETを用いて認知症の脳の病態生理を明らかにし、早期診断法や鑑別診断法を開発することを期待する。

2 研究成果

平均4.8点

- ・多くの知見が得られていて、目標通りに達成していると考える。
- ・精力的に貴重な臨床データを積み重ね、認知症の早期診断に貢献する成果を出している。
- ・アルツハイマー病の臨床診断につながるFDG-PET画像の研究、アポE4との関連研究はかなりの成果だと見られる。
- ・認知症の新たな診断薬の開発を進めている。
- ・DNA合成能を指標とした、がん診断法の開発。

評点の理由、コメント

●神経画像研究チーム

3 研究成果の還元

平均4. 2点

- ・国際標準化の成果とその還元は、すばらしいとの印象を受けた。
- ・行政・地域・産業に大きく貢献し、期待感も大きいと思うが、医療現場で使うようになるために、さらなるデータの積み重ねが必要である。
- ・実用的な成果を出している。
- ・すぐれた研究を行っているのに、その内容が一般市民に伝わっている度合いが少ないように感じます。シンポジウムや講演会などで成果を公表しているようですが、どのような反響があったかなどもう少し具体的に分かるように記述してほしい。
- ・アミロイドイメージング検査法が国際的互換性を持ち、人種間差がほとんどないことを確認できたことは、アルツハイマー病制圧に欠かすことができない成果である。

4 今後の展望と発展性

平均4. 6点

- ・新しい診断法の確立に期待する。
- ・多くの研究がヒトの健康長寿に貢献できることから、さらなる研究継続を望む。
- ・アミロイドイメージングの先を行く画期的な診断法を開発することを、研究所や病院の各部門と協力して目指してほしい。
- ・当センターのアミロイドイメージングの研究開発が認知症疾患の早期診断、発症予測に役立つ可能性が高いと感じています。がんの治療効果を判定する診断法にも期待したい。
- ・認知症疾患医療センターとして地域での役割が強く求められる中、迅速な診断に役立つ新薬の開発は大きな意味を持つ。

5 総合評価

平均4. 63点

- ・新しい機器を用いているとのadvantageはあるものの、着実に成果を出していると思われた。
- ・研究が大きく進展していると感じました。
- ・なるべく早い医療現場での使用ができるように努力していただきたい。
- ・コンパクトに実際的な研究が行われている。画像診断のみならず、研究所、病院全体で画期的な認知症診断、予防、治療技術の開発を目指してほしい。
- ・PETの可能性を更に広げる研究に、期待している。

6 評価を終えて

- ・センターとしてこのチームの研究を長期的に支援することが重要と考えます。

自然科学系に対して

評点の理由、コメント

5 総合評価

・各チームとも研究に対する熱意と相応の成果が得られているとの印象を受けた。今後への期待を持った。昨年より優れた発表であった。

・どの研究も、大半はすばらしいものだと感じています。ただ、この報告書を一般の東京都民が読んだときに、理解できる人はほとんどいないと思います。一般の人が読んでも理解できるように、専門用語の解説も含め、分かりやすい解説ふうの記述がほしいです。まず最初に、この研究がどういうふうに役立つかをはつきりと記したうえで、その目標に向かって、いまこういう段階の研究をしています、といった記述の方が理解しやすいかと思います。

専門的な記述の中に解説を入れるのが難しいならば、この報告書とは別に市民向けに解説冊子をつぐってはどうでしょうか。

6 評価を終えて

・論文リストには、原著論文ではインパクトファクターも付記されると評価しやすい。

・当該年度に行った研究の発表と成果を中心に(今年度の成果が明確になるような発表が望ましい。)

・当研究所での実施された研究と他での研究(共同研究)の違いがわかるような発表をお願いできたら幸いです。

・せっかくすぐれた研究を行っているのに、都民に広く知られていないのが一番残念です。都民に医療・健康情報を伝えるのは各種マスコミの記者ですから、2か月に一度、記者向けに研究成果を解説する記者セミナーが必要でしょう。国立がん研究センターは年間10回、記者セミナーを実施しています。これと同じことを当センターが実施するのは難しくないと思います。記者が知らずして、都民が知るはずもありません。せめて5つの研究チームがそれぞれ1回、3時間くらいのセミナーを開ければ、当センターがいかに有用な研究を行っているかがわかるはずです。ぜひ、記者向けセミナーをやってください。

社会科学系(B系)報告

東京都健康長寿医療センター研究所（社会科学系）の外部評価報告について

社会科学系 外部評価委員会

委員長 長田 久雄

東京都健康長寿医療センター研究所は、自然科学系と社会科学系の2系に分かれており、本委員会は社会科学系について評価を行った。

社会科学系は、社会参加と地域保健研究チーム、自立促進と介護予防研究チーム、福祉と生活ケア研究チームの3チームで構成され、それぞれに中期計画の目標達成に向けて研究を進めている。

各研究チームから事前に提出された研究報告書と当日のプレゼンテーションを基に、研究所が定めた評価項目及び評価視点を基に行った評価を、委員会としてとりまとめたので、ここに報告する。

各委員の評価について、チーム毎に以下のようにまとめる。

①社会参加と地域保健研究チーム

中期計画の目標達成に向けて、概ね順調に研究が進行していると考えられる。全体として、研究で得られることが期待される知見や成果は、社会的に必要性の高いものと思われるため、今後は、チームとしての全体的統合性の観点から、テーマ及びサブテーマを有機的に関連付け、鳥瞰的な観点から位置づけを明確にすることで、チームとしての研究成果がより明瞭となり、社会に対してより具体的且つ効果的に還元していくことができるものと期待される。

②自立促進と介護予防研究チーム

適切な研究計画に基づいて実証的な成果が着実にあがっていると評価できる。本研究テーマは、市区町村、都、国など社会的要請度が極めて高く、その成果の還元を強く期待されている大変重要な研究である。また、研究計画は妥当であり、研究成果も上がってきている。本年度までの成果を基にして、中期計画の最終年度である次年度に実践的応用を達成することが本チームの目的と意義にかなったことと考えられる。介護予防プログラムなど、実際の医療福祉行政に生かしていくよう一層の検証と研究を期待したい。

③福祉と生活ケア研究チーム

概ね中期計画に沿って進められており、中期目標の達成の実現が期待できる。また、東日本大震災後に、東京都内における災害関連の研究が実施されたことは、有用であり評価できる。今後は、研究成果を社会に還元していく上で、具体的な研究手法についての検討や提案を行っていくことを期待する。

社会科学系全体の総論を述べる。

3つのチームそれぞれが、多くの研究テーマについて精力的に活発な研究を行い、成果をあげていると言える。また、東日本大震災後に、当初中期計画には含まれていなかった震災への対応に関する研究を行い、有用な成果が得られたことは本研究所の活動として有意義であったと思われる。

一方で、各研究がそれぞれ独立して完結している印象があることも否めない。いくつかのチームやテーマにおいては、研究内容的にかなり重複しているものもあるので、包括的な視点からチームやテーマを超えた協力体制を構築することで、得られた研究成果をより効果的に社会に還元していってもらいたい。

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●社会参加と地域保健研究チーム

チームリーダー：新開省二

委 員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	3.8	3.8	3.4	3.8	3.66
	4点×4名 3点×1名	4点×4名 3点×1名	4点×2名 3点×3名	4点×4名 3点×1名	

3チーム中 2位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均3.8点

・健康度に対応したアクションリサーチの構造はわかりやすく整理されている。アクションリサーチの成果から、より一般活用できるガイドライン等を提示することは、とても意義あることである。長期縦断研究の実施と成果は貴重なものである。

・本研究チームには、社会参加・社会貢献の促進に関する研究と老化・虚弱の一次予防と地域保健に関する研究の2つのテーマが設定されている。それぞれの研究のテーマの下には、それぞれ4つのサブテーマが含まれている。両テーマとも、必要性の高いテーマ設定であり、有用性が認められる。また、全てのサブテーマとはいえないが、他の研究チーム、病院、行政や企業を含む外部機関との連携も行われている。また、草津、鳩山における長期縦断研究が継続され、養父市との協同研究も開始されるなど、他機関との連携継続、新規展開およびRCTデザインや地域介入など、研究計画における独創性・妥当性の努力も認められる。

・テーマ1. 社会参加・社会貢献の促進に関する研究では、同一地域における「戦略的」取り組みが特徴として記載されているが、それぞれのプログラムに有機的なつながりがなく、「社会参加システムの構築」を目的とするとしては、研究計画として十分検討されいるとは言えない。

テーマ2. 老化・虚弱の一次予防と地域保健に関する研究では、血清βミクログロブリンの研究については研究目標自体は有益であると考えるが、22年度の成果が不明確であり、23年度目標の設定の妥当性が不明である。その他の3つの研究の目標は妥当であると考える。

・社会参加に関して、就労支援による男性の地域活動への参加促進の研究、生涯学習型参加プログラムの実証研究、社会的孤立の早期発見とハイリスク者への見守りセンターによるパイロット事業と、それに社会的な必要性も高く、社会での実用・応用が求められている。ただ、3つに分類されたプログラムが独立しており、どう連携し、全体としてどう構築されているのか分かりづらかった。

・地域保健に関して、日本ではあまり研究が進んでいない「虚弱」に焦点をあてている点も意義があると思った。

・超高齢社会において「健康余命の延伸に向けた政策立案」に取り組み、平行して「高齢者の社会参加の促進に向けた政策立案」を行うことは、まさに必要性の高い研究と言える。

・「社会的孤立に関する研究」は大都会における大きな課題である孤立死対策に関する研究として期待できる。

評点の理由、コメント

●社会参加と地域保健研究チーム

2 研究成果

平均3.8点

・研究目的に沿って達成された結果が示されている。長期縦断研究による成果は、今後への予測が示されている。

・東日本大震災の影響もあり、昨年度は必ずしも予定通りに研究が進められなかつた点があり得るが、大部分の研究は平成23年度に目標とされた内容を達成していると認められる。男性の地域ネットワーク縮小傾向、読み聞かせの認知機能への効果、認知機能低下のリスク、健診の効果など明解な結果が得られているものもあったが、アウトカムやプログラムの評価や効果検証が予定されているサブテーマの中には、その前段階や分析途上のものもあった。平成24年度の中期計画の最終目標に向けて確実に進めることが期待される。

・年度別計画表に記載されている研究内容については、概ね順調に進行していると考える。

ただ、「社会参加及び健康長寿の医療経済分析」について、「データセットの整備」が年度計画になっており、その重要性は理解できるが、「どのような分析(研究)をする」ために、「どのような整備を行うか」についての記載がなく、判断できない。

・地域包括の職員への聞き取りから、ハイリスク者の早期発見要件のポイントや、見守りセンサーでチェックする情報を抽出し、分かりやすく整理・簡便化していることは意味がある。また、実際にチラシをつくりたり、パイロット事業を行い、検証を取り組んでもいる。今後は、その検証事業などの成果を整理し、実際に地域社会でどうすれば利用できるのかを分かりやすく提示してほしい。

・認知機能の低下が歩幅に関係があると示したこと、介護予防健診の実施により要介護認定新規発生率が低下したことは興味深いと思った。また、握力低下で要介護発生率が上昇するというのもおもしろいと思った。一方で、例えば、握力を維持する活動をすれば要介護発生率が下がると言えるのか？

・「リプリント」の実践に興味を持った。4箇所で実施されているが、この様な取組の広がりに期待する。

・見守りに関し、大田区での実践について期待できる。

3 研究成果の還元

平均3.4点

・個別の研究では対象地域等における還元はなされていると思われるが、その広がり、影響力はわかりにくい。これまでの成果が第2次健康日本21に活かされたことは評価できる。

・研究成果の還元は研究成果と連動すると考えられるが、大田区の高齢者見守りネットワークにおけるチェックリストの作成と普及、第二次健康日本21の策定への提言など、積極的な還元が行われている研究成果もある。しかし、現状では分析や課題の整理、モデルの構築やシステム作り、パイロット事業の段階の研究や、特定の地域に限定された成果と考えられる研究もあり、中期計画の最終年度に向けて、具体的な社会的効果に結びつく方向へと一層進められることを期待したい。

・行政、特に、東京都は言うまでもなく、厚生労働省を始め国の貴研究所の成果に対する期待は極めて大きい。本チームの行政・地域施策への貢献は一定以上あると考えるが、「期待度」に対してという視点からは、今以上の成果の還元が期待される。それは、具体的な市区町村におけるモデル事業を通じて、都、国の施策反映を意識した研究としての取組が若干弱い感じがするからである。

なお、チームリーダーは国の委員等もしており、行政への提言、貢献が、今後も大いに期待できる。

・孤立リスク者の早期発見チェックシートは、検証を早期に行い、地域でどう使えばいいのかという具体策も含めて、提示してほしい。社会で簡便に使えるものとなれば、意義は大きい。配っただけでは、発展性に欠けるように思う。

・介護予防健診が要介護発生率の低下に効果があることを示したこと、「第二次健康日本21」に反映されたことは成果の一つだろう。ただ、実際に何をどうすればいいのかという点までかかわってこの社会貢献だと思うので、今後に期待したい。

・単身世帯高齢者の孤立化が大きな課題となっているが、大田区で行われている見守りネットワーク事業などが、都内他自治体へ広がっていくことを期待する。(広げていくためのモデル構築をお願いしたい。)

評点の理由、コメント

●社会参加と地域保健研究チーム

4 今後の展望と発展性

平均3.8点

- ・日本の現代、将来に向けた重要課題に取り組まれている。
- ・中期計画の目標達成に向けて、概ね順調に研究が進行していると考えられる。中期計画の最終年度である来年度の目標には、要因解明、制度・政策提言、手法の提示、予防プログラムの提案、予防推進システムの提案、評価などが掲げられているが、これらの目標はいずれも社会的に大きな影響を持つ可能性が高い。従って、十分なエビデンスに基づき研究成果を丁寧に確認検証し、それを基にして中期計画の達成を目指すことが期待される。とくに、限定された対象や地域に実施された研究の一般化には慎重であることが望まれる。また、本チームには多様な研究が含まれており、中期目標として掲げられている8つのサブテーマが、どのような関連や位置づけをもって社会参加・社会貢献の促進と老化および虚弱の一次予防に、さらには本チーム全体の目標・目的へと統合されるか、相互間の関連なども含めて示されると、研究成果をより効果的ではないであろうか。
- ・一部の研究については、年度計画に十分対応できていない計画はあると考えられたが、概ね、中期目標の達成は可能であると判断された。
- ・ほとんどの研究はその方向性が適切であり、必要性も感じられた。
- ・見守りセンターは、大変興味深いが、類似の研究がいろいろある中、この取り組み(パイロット事業を実施したこと)でどのような効果があったのかの成果を示すと同時に、費用的な面も含めて実効性ある仕組みになるのか、ビジネスモデルとしてどうすればいいのかなどを提示してほしい。
- ・認知症の一次予防につながるエビデンスを、実際の予防活動に使えるものとできるのか、具体的に何をすればいいのかを示してほしい。
- ・介護予防健診を国全体として行うことで、介護予防につながり介護保険等の費用の効率化につながるのか等について、費用対効果の点も示してほしい。
- ・孤立予防に向けた重層的地域包括ケアモデルを構築し、それを広める手段を提示していくて欲しい。
- ・3つのフィールドでの調査を続けると共に、その結果の都内自治体へのフィードバックを期待する。

評点の理由、コメント

●社会参加と地域保健研究チーム

5 総合評価

平均3. 66点

・課題ごとに取り組み、目的達成されている。しかし課題テーマが多様であり、十分に時間をかけることができているのか気になるところである。アクションリサーチについて、研究方法としてどのように適用し、アクションリサーチならではの成果が得られたのか。研究方法としてアクションリサーチを確立し、それを普及するような活動も行ってもらいたい。

・総合的に中期計画の目標・目的に沿って研究が進められ、成果があがり社会的還元が行われていると認められる。チームとしての全体的統合性の観点からは、2つのテーマおよび8つのサブテーマが有機的に関連づけられ、鳥瞰的な観点から位置づけが明確にされるならば、さらにチームとしての研究成果が明瞭になり、成果の活用がより効果的に行われるのではないであろうか。

・本チームにおける研究テーマである「社会参加・社会貢献の促進に関する研究」・「老化・虚弱の一次予防と地域保健に関する研究」は、いずれも社会的要請度の極めて高い、大変重要な研究であり市区町村、都、国、いずれにおいても、その成果が強く期待されているところである。
両テーマリーダーの卓越した指導力で、両研究テーマについて多くの個別研究がある中で、概ね順調に研究は進行していると考えられた。しかし、一部の研究では、研究テーマのタイトルとその内容が合致していないものもあった。「非常勤研究員を合わせると25名が協力して研究を推進している」というリーダーの発言を考えると、成果がもっとあっても良いのではないかと感じた。

・全体として、研究で得られることが期待される知見や成果は、社会的に必要性の高いものと思われるが、それだからこそ、単に「こんな結果が出た」というだけではなく、それを社会でどう実施すればいいのか、どう生かせるのかという点を含めた成果を最終的に示してほしい。

・高齢者の社会参加は大変重要な課題であり、基礎自治体の中でどう実現していくかが求められる。
具体的な提案を期待する。

6 評価を終えて

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●自立促進と介護予防研究チーム

チームリーダー：栗田主一

委 員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	4	4.2	3.8	4	4

4点×5名 5点×1名 4点×4名 3点×1名 4点×5名

3チーム中 1位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均4点

・重要な研究課題に取り組まれている。

・本研究チームには3つのテーマと、8つのサブテーマが含まれている。いずれのテーマも、必要性の高いものであり、他のチーム、病院、行政や企業を含む外部機関との連携も積極的かつ活発に行われている。幾つかのサブテーマにおいて、適切な研究計画に基づき、複合的プログラムの効果を検証し成果が得られていることは評価しえる。しかし、各介入方法は必ずしも新規性の高いものとはいえないようと思われる所以、既存の介入方法が複合的に行われることにより大きな効果をあげることと、その実践的適用の有用性を強調しては如何であろうか。介護予防事業への不参加者の特性は、社会的普及・還元の基礎として必要性が高いと考えられる。後期高齢者の運動機能測定項目を組み合わせた指標の作成、医療機関における認知症対応力評価尺度の開発、生活困窮者の自殺実態と予防のテーマは新規性と必要性のあるテーマであると考えられる。

・テーマ「抗酸化ビタミン」の研究は、どのような必要性の下で計画され、本年度の成果がそれに対してどのような意義があるかが不明確である。また、PowerPoint資料にあった「4. その他 1)2)3)」はいずれも重要な研究であると考えるが、中期計画にあるのでしょうか。報告書の「年度別計画表」に記載がなく、プレゼンでも説明がなかったので、位置づけが不明です。計画にないが、実施している、ということでしょうか。テーマ「認知症・うつの予防と介入の促進」は、国としても喫緊の課題であり、研究としての必要性、重大性は極めて高く、個別の研究計画も、他の研究機関ではできないような内容となっており、独自性も伺える。全体として、研究の目標は妥当であると考える。

・高齢者が自立して生活するために課題となっている諸問題について、RCTによる介入研究を行い改善プログラムの作成を目的としていること、また、増え続ける認知症高齢者の早期発見のための手法の開発、国が進めている認知症疾患医療センター等の質向上のための尺度開発などは、社会的に必要性が高く、独創性もあると考える。

・高齢者が急増する中でサルコペニア、膝痛、認知症などの要因を解明し、効果的な予防プログラムを開発することは、高齢者が生活の質を保持し、安全に暮らすことができる地域社会の創出に寄与する上で重要である。

評点の理由、コメント

●自立促進と介護予防研究チーム

2 研究成果

平均4.2点

- ・研究目的、計画に沿って着実な成果を上げている。年度目標－健診方法の開発は、健診に用いる心理測度開発が目的なのか。
- ・筋骨格系の老化予防の促進のテーマに関しては、3つのサブテーマとも中期計画の研究目標・目的に従って、明確な研究計画に基づき明瞭な結果が得られている。介護予防の促進においても、3つのサブテーマとも中期計画の研究目標・目的に沿って研究成果があがっていると認められる。認知症・うつ症の予防と介入においても、2つのサブテーマとも中期計画の研究目標・目的に沿って研究成果が得られていると考えられる。次年度の目標・目的であるプログラム開発・普及、提案、システムの構築に向けて、本年度の成果を整理されることが望まれる。
- ・年度別計画表に記載されている研究内容については、順調に進行していると考える。また、今回の東日本大震災を受けて開始された「災害時の認知症医療・ケアの課題」については、精力的に取り組まれ、その報告書を速やかに作成したことは特筆に値する。
- ・筋骨格系老化予防プログラム開発に向けた各種のRCTを実施し、現時点での結果を出している。
- ・運動機能低下と血中ビタミンC濃度との関係に関する研究などで興味深い成果をあげている。ただし、口腔機能向上に関する検討に関して、複合プログラムの効果を検証したとあるが、提示された資料からは、どんなプログラムを提供したことで閉眼片足立ちなどの項目が有意に改善を示したのか、問題の「複合プログラム」の中身が私にはよく分からなかった。
- ・認知症の早期発見のための各種ツールの作成と検証、地域の中で認知症高齢者を検出し、アセスメントする調査ツールの作成など、今後、急激に増えると考えられている認知症高齢者を適切なケアに結びつけるために意義が大きい。中でも、認知症疾患医療センターの質向上に向けた尺度の開発と東京都での現状調査は衝撃的な結果が出ていることに注目したい。
- ・各項目で介入の有効性が証明されており、新たな介護予防プログラムに活かされることを期待する。

評点の理由、コメント

●自立促進と介護予防研究チーム

3 研究成果の還元

平均3. 8点

- ・個々の研究の成果還元の状況はわかりにくいものもあるが、地域貢献もされ、社会貢献高い活動がみられた。
- ・研究成果は、中期計画に沿ってあがっているが、現時点では、社会への応用的還元が十分達成されていとはいえない。計画通りではあるが、可能な成果から学術的公表にとどまらず、具体的な社会的還元に移してゆくことが望まれる。適切な研究計画によって得られた実証的成果をどのようにプログラム化し社会的還元を行うか、また基礎的リテラシーの研究成果を基にどのように効果的な情報提供方法を開発するか、主観的認知機能低下チェックリスト、地域包括ケアシステムにおける認知症アセスメントシート、医療機関における認知症対応力尺度などを、エビデンスの検証を基にして確立し、活用し普及するか、ということが現状および今後に一層期待される。
- ・行政、特に、東京都は言うまでもなく、厚生労働省を始め国の貴研究所の成果に対する期待は極めて大きい。本チームの行政・地域施策への貢献は一定以上あると考えるが、「期待度」に対してという視点からは、今以上の成果の還元が期待される。特に、「認知症・うつ予防」、「自殺対策」は、市区町村において大変大きな問題であり、その具体的な対応策が求められている。その意味で、更なる研究成果の還元を求めたい。
- ・筋骨格系老化予防に関する各種研究については、研究の成果を実際の予防プログラム作成などで行政へ提言、社会への貢献を果たすことが今後の課題だと思われるが、大いに期待したい。
- ・口腔機能向上に関する効果検証の結果が、今年度の介護報酬改定に取り入れられている。
- ・認知症早期発見のための各種ツール、認知症疾患医療センターの質改善のための尺度など、開発・検証された成果を、行政や審議会、学会等で発表、提言している。また、今後、実際の医療や行政の中で使われることが期待される。それにより医療福祉の現場、医療機関の質向上につながることが期待できる。
- ・認知症対策推進会議等に参画し、行政施策に反映している。
- ・転倒予防プログラムなどが、介護予防事業へ還元されている。

4 今後の展望と発展性

平均4点

- ・研究課題による達成状況は異なるのではないか。研究計画に沿い変数間の関係を示す研究枠組みが明示されるとよい研究がみられた。
- ・中期計画の本年度の課題は達成されていると思われる所以、来年度は、普及および提言、システムの構築、プログラムの開発と完成を目指すことが期待される。現時点での基礎的な研究成果を基にして、応用的実践的な社会還元を積極的に実施する方向での発展が望まれる。
- ・年度計画以上の対応をしており、限られた人員体制の中でも、中期目標の達成は可能であると判断された。
ほとんどの研究はその方向性は適切であり、必要性も感じられた。
- ・介護予防プログラムなどが都内で広く活用されるよう、行政との連携強化を図っていって欲しい。

評点の理由、コメント

●自立促進と介護予防研究チーム

5 総合評価

平均4点

・研究目的、課題により、成果がみられるよう研究方法が工夫されている。これまでの研究成果がよく積み重ねられ、今年度の研究につながっていることは評価できる。大震災が起り、計画されていた内容に災害時対応を包含されたことは社会的意義あり、必要性に応えるものであった。

・適切な研究計画に基づいて実証的な成果が着実にあがっていると評価できる。本年度までの成果を基にして、中期計画の最終年度である平成24年度に実践的応用を達成することが本チームの目的と意義に叶ったことと考えられる。各サブテーマを、たとえば認知症とか地域介入、介護予防という視点から相互に関連づけ統合することはできないであろうか。チーム内外ともに、各サブテーマが単独で完結することにとどまらず、成果を可能な限り有効に活用されることが望まれる。なお、中期計画の当初においては含まれていなかつたが、東日本大震災後に設定された災害関連の研究は必要性、有用性の点で評価しそる。

・本チームにおける研究テーマである「筋骨格系の老化予防の促進」・「介護予防の推進」・「認知症・うつの予防と介入の促進」は、いずれも市区町村、都、国など社会的要請度の極めて高く、その成果の還元を強く期待されている大変重要な研究である。

チームリーダーと両テーマリーダーの指導力は定評があり、研究テーマについて多くの個別研究がある中で、概ね順調に研究は進行していると考えられた。しかし、個別の研究テーマが多岐にわたり、十分な研究成果が上がっているか評価が困難な部分があつた。

「非常勤研究員を合わせると25名が協力して研究を推進している」というリーダーの発言を考えると、成果がもっとあっても良いのではないかと感じた。

・大変興味深い研究結果、また成果物が出ていると思う。実際の医療福祉行政に生かせるものとして、一層の検証と研究の成果を期待したい。

・より有用な介護予防プログラムが整備されるよう、また介護予防事業への不参加者を減らす手立てにも期待する。

6 評価を終えて

・研究課題が多様であるためエネルギーが分散するのではないか。重要課題を精選し、じっくり研究に取り組む体制が必要でないかと思う。

社会科学系 外部評価委員会 チーム別評定結果

【各5点満点】

●福祉と生活ケア研究チーム

チームリーダー：石崎達郎

委 員	1 研究計画の創造性・妥当性	2 研究成果	3 研究成果の還元	4 今後の展望と発展性	総合評価
平均	3.6	3.8	3	3.6	3.46
	4点×3名 3点×2名	5点×1名 4点×2名 3点×2名	4点×1名 3点×3名 2点×1名	4点×4名 2点×1名	

3チーム中 3位

評点の理由、コメント

1 研究計画の創造性・妥当性

平均3. 6点

・研究テーマ：在宅療養支援の中で、高齢者の心理→今年度の老年的超越がどのように関連するのか、よく理解できなかった。全体として研究の必要性はある。

・本チームでは、在宅療養支援方法の開発のテーマの下に5つ、要介護化の要因解明と予測のテーマの下に3つ、終末期ケアの在り方のテーマの下に2つのサブテーマの研究が行われている。いずれも、研究所および本系、本チームのミッションに沿った研究が行われていると評価し得る。他チーム、病院、外部機関との連携も活発に行われている。多くのサブテーマが独創的、新規的な内容を含んでいるが、初期の研究目標・目的との対応を明確にさせながら研究を進めることができると感じた。

・Lawtonのサクセスフルエイジングの考え方を柱に、研究の目的を整理している点は良い発想であるが、3つのテーマがそれぞれそのどの領域（分野）に位置づけられるのかが分かればより研究計画の独自性・新規性・必要性の評価が高くなる可能性があった。

「…の関連を解明」・「…影響評価」・「…の実態把握」は年度計画としては問題ないが、最終年度である平成24年度の計画においても「…の解説」というのが複数あり、年度計画の妥当性が若干気になった。ただ、全体として、研究の目標は妥当であると考える。

・在宅療養支援、災害時への対策の策定、終末期の看取りケアと、今後の日本にとって大変重要なテーマばかりで、研究及び具体的な対策の提言、実施等は大変必要性が高いと思う。ただ、発表された研究の具体的なテーマ設定、手法については、既視感があり、新規性・独創性には欠けるように感じた。

・ここで示された3つの目的は、後期高齢者数が急増する東京において、高齢者の地域生活支援に欠かすことのできないテーマである。

評点の理由、コメント

●福祉と生活ケア研究チーム

2 研究成果

平均3.8点

- ・課題によるばらつきがみられたため。
- ・研究成果は、それぞれのテーマにおいて着実にあがっていると考えられる。社会関係資本のネガティブな影響をもつ側面、介護ニーズの重度化に関する社会的要因の解明、介護負担感が低い虐待事例介護者への支援方法に関する知見、医療機関で死亡した高齢者の死亡直前の入院日数の分析結果、終末期医療への意向の表明などに関する研究成果などは注目に値するものといえる。ただし、研究達成状況は、震災の影響も考慮する必要があるが、各サブ研究によってバラツキがあるので、進捗が遅れている研究は中期計画の達成に向けての努力が望まれる。
- ・年度別計画表に記載されている研究内容については、順調に進行していると考える。また、今回の東日本大震災を受けて開始された「在宅療養者の災害対応、被災者支援に関する研究」については、狭義の研究ばかりではなく、支援にも精力的に取り組まれ、継続している点は評価に値する。
- ・当日の発表にはなかったが、提示された資料から、認知症の周辺症状を出現させる以前の高齢者の兆候を明らかにして、ケアの方法を提案した研究、また、厚労省の介護予防マニュアルに採用された認知機能低下予防プログラムの開発に関する研究など、成果を挙げている。
一方で、災害対応に関する研究で明らかにされた課題は、すでに言われているものが多く、それをどうするかの具体策を導き出す研究が求められると思う。また、介護保険制度の評価については、介護の社会化は進んでいないとする結果については、前提の置き方で見方も違うのではないかと感じる。説得力を高めるための補足調査、また負担軽減に至って居ないとするなら、それをどうしたらいいのかを提示してほしい。死亡直前の入院についても、結果は既視感があり、そこから導き出される提言として何を言いたいのか見えなかつた。
- ・東日本大震災による都内在宅系介護事業所に対する影響調査で、都内高齢者等の被害実態を明らかにすることことができた。

3 研究成果の還元

平均3点

- ・今後、成果の還元が期待される。
- ・厚生労働省の介護予防マニュアルへの採用、養介護従事者等による高齢者虐待対応の手引きの作成、自治体における介護予防体操の普及活動の実施など、積極的な社会的還元が行われている研究成果もあるが、基礎的研究成果が得られている段階であり、今後、行政、地域、産業等の施策への貢献が期待されるものの、現時点では未達成の研究もある。本チームの目的として、生活機能、精神的健康状態、生活の質、生活環境向上に資する研究の実践と社会への成果還元が掲げられることから、中期計画の最終年度である平成24年度においては、研究成果の実践的、応用的社会還元を積極的に進めることが期待される。
- ・行政、特に、東京都は言うまでもなく、厚生労働省を始め国の貴研究所の成果に対する期待は極めて大きい。本チームからは貴重な、意義深い研究成果が多数出されているが、行政・地域・産業等の施策への貢献・反映という点からはやや具体的なものが見えにくい。特に、いずれの研究テーマも、市区町村において大変大きな問題であり、その具体的な対応策が求められている。「終末期ケアのあり方の研究」は、貴研究所において本チームのみしか対応しておらず、その意味で、更なる研究成果の還元を求める。
- ・看取りケア体制強化の実践的介入研究については、ケア体制の施設間格差をケア環境尺度で把握するとの手法が取られているが、現時点での検証結果が示された資料からでは分からなかった。そもそも、都内の特養もしくは都民が入所している近隣県も含めた施設のどれくらいが看取りまで取り組んでいて、実際にどれくらい看取りを行ったのか。実際に行った例の多い施設の要因は何か、環境のほかに施設長の意識が大きいのではないか、救急搬送をするかどうかの決定をどうしているのかという基本的なところをおさえ、そのうえでどうあればいいのかを提言してほしいと感じた。
- ・東日本大震災による都内高齢者の被害実態を踏まえ、首都直下型地震等への対応策の検討。

評点の理由、コメント

●福祉と生活ケア研究チーム

4 今後の展望と発展性

平均3. 6点

- ・重要な研究分野であるため、これからも熱心に取り組み成果を上げていってほしい。
- ・中期計画に沿って進められており、中期目標の達成の実現が期待できる。各サブテーマには、相互に関連がある研究もあるように思われ、チーム内外との連携、統合などが進められる可能性を検討することが望まれる。東日本大震災後に設定されたと考えられる東京都内における被害状況、災害対応、被災者支援に関する研究は必要性が高い重要なものであると考えられる。また、社会関係資本、在宅継続困難等に係わる要因の解明の成果は、プロセス、要因の解明から、社会的応用、提言等に発展させることが期待される。
- ・年度計画以上の対応をしており、限られた人員体制の中でも、中期目標の達成は可能であると判断された。
- ・ほとんどの研究は、その方向性は適切であり、必要性も感じられた。ただ、複数の研究で最終年度の研究成果の意義・必要性がわかりにくいものがあった。
- ・要介護化の要因解明と介護保険制度の評価にしても、看取りケアにしても、研究テーマとしての重要性は大変高いが、研究結果を社会の生かすためにも、具体的な研究手法や項目について、もう少し検討が必要ではないかと感じた。
- ・医療・介護が施設から在宅へと舵を切っていく中、在宅療養支援のあり方が問われており、具体的な提案が期待される。

5 総合評価

平均3. 46点

- ・熱心に取り組まっていた。課題により、年度計画目標にそった成果が得られたものとそうでないものの違いがみられた。
- ・進捗状況にバラツキはあるが、概ね中期計画に沿って研究が進められていると考えられる。本チームは、社会的還元が不可欠な研究内容を含むため、確実なエビデンスを検証しつつ社会的、実践的応用を積極的に進めることができると想われる。東日本大震災後に、東京都内における災害関連の研究が実施されたことは有用であり評価し得る。本チーム内外の関連する研究成果との統合を図ることも今後検討して欲しい。
- ・本チームにおける研究テーマである「在宅療養支援方法の開発」・「要介護予防の要因解明と予測」・「終末期ケアのあり方の研究」は、いずれも市区町村、都、国など社会的要請度の極めて高く、その成果の還元を強く期待されている大変重要な研究である。
研究テーマについて多くの個別研究がある中で、概ね順調に研究は進行していると考えられた。「要介護予防の要因解明と予測」においては、高い研究レベルであり評価されるが、どのように社会に還元するのかが最終年度前ではあるが、気になった。「終末期ケアのあり方の研究」は、大変興味深い研究成果が得られてきているが、今後の研究の発展性についての方向性を明確にする必要を感じた。
- ・東日本大震災を受けて、都内在宅サービス事業者に対して行った調査は、適時適切な対応であったと思う。

6 評価を終えて

- ・報告資料とパワーポイント資料との関連がわかりにくかった。緊急の災害支援に関わる活動にエネルギーの多くが割かれたためか、もともとの研究計画のなかでの活動成果が十分得られなかったように思われる。全体に印象に残ったこととして、研究課題を絞り、どう表すかでその重要性や新規性が見えるようになるのではないか、それによって研究方法が練られていくと考える。社会にとって有用な研究を推奨する機関として、時代の緊急ニーズに対応した研究活動を柔軟に推進、支援できるように、またそのことを評価できるようにしてほしいと考える。

社会科学系に対して

評点の理由、コメント

6 評価を終えて

・本チームのことだけでなく、研究助成金ごとの研究活動になつていなかつた。主要な研究活動の柱があり、それにじっくり取り組めるような体制が必要ではないか。

・先ず、本系の3つのチームが精力的に活発な研究を行い、成果をあげていることに敬意を表したい。そのうえで、幾つかの所感をのべさせ頂く。

(1). 東日本大震災後に、当初中期計画には含まれていなかつた震災への対応に関する研究を行い、有用な成果があがつたことは、本研究所の活動として有意義であった。

(2). 本系においては、多くのテーマが研究されているが、その一方で、各研究がそれぞれ独立して完結している印象があることも否めない。たとえば、認知症や介護予防などに関連した研究は、幾つかのチームやテーマにまたがつておる、切り口が異なるとしても、もし包括的な視点から再構成することができれば、より効果的な成果が得られ社会的還元が可能であると考えられる。中期計画の最終段階では、3つのチームを統合する視点から、社会科学系の全体像と各テーマ、研究の位置づけを鳥瞰するような体系化ができないものであろうか。また、基礎的研究成果を社会実践として還元する方法そのものの研究も本系の共通基盤的研究として必要ではなかろうか。

(3). 社会科学系には、RCTや長期縦断研究、介入研究などを用いた貴重な基礎的研究の成果が上がっている。文化の影響の少ない、もしくはグローバルな共通性の高い基礎的な研究成果は、積極的に国際的学術雑誌に公表すべきである。一方、日本の文化や制度などとの結びつきの強い研究は、国内の学術雑誌に公表し、エビデンスを検証しつつ、尺度構成、システム・プログラム開発、政策や施策等への提言、普及啓発活動、実践活動などを通して、応用的実践的社会還元を積極的に行うことが期待される。すなわち、基礎的研究成果→エビデンスの確認→応用法の開発と検証→社会還元→社会還元成果の検証という流れを考慮しては如何であろうか。

(4). 現時点では、特定の地域や対象において研究成果が得られている研究がある。今後は、こうした成果を一般化し、普及することに結びつく研究も望まれる。

・社会科学系全般に共通の感想ですが、3チームがそれぞれ独自の研究目的、研究計画、研究体制で研究を実施することは当然と言えば、当然であるが、内容的にかなり重複があるものもあり、研究を実施する上で、市区町村等との連絡・調整など、さまざまな事務作業等があり、研究の効率的な実施、運営に資することを考慮すると、チームを超えた協力体制の整備も意味があるのではないかと感じました。全体を俯瞰するお立場である高橋龍太郎副所長の役割であるかもしれません。

・私の評価はやや厳しかったかと存じますが、それは、本研究所に対する社会、研究者、学会など多くの人、機関の期待の大きさの裏返しです。日本における社会科学系老年学の牽引車としての貴研究所は、東京都の宝であるばかりでなく、世界に誇る日本の知の財産であると考えます。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会設置要綱

22健事第1174号
平成22年12月24日制定

(設置目的)

第1条 地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター 東京都健康長寿医療センター研究所（以下「研究所」という。）が実施する研究について、厳正な評価を行い、もって、より効率的・効果的な研究活動を推進し、都民である高齢者のための健康維持や老化・老年病予防に寄与する研究体制づくりに資することを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

(所掌事務)

第2条 委員会の所掌事務は、次のとおりとする。

- (1) 前条に定める研究の評価を行うこと。
- (2) 前号の研究評価を実施した後、速やかに、評価結果及びその概要をとりまとめ、必要な意見を付して、センター長及び研究推進会議に報告すること。
- (3) その他、センター長が必要と認める事項

(組織)

第3条 委員会は、次の各号に定める委員会とし、各委員会に委員長を置き、委員長は、委員の互選により選出する。

- (1) 自然科学系研究外部評価委員会
- (2) 社会科学系研究外部評価委員会

2 委員長は委員会を招集し、会議を主宰する。

3 委員長に事故がある時は、あらかじめ委員長が指名した委員が委員長の職務を代行する。

(構成)

第4条 各委員会は、次の各号に掲げる評価委員（以下、「委員」という。）5名以内をもって構成し、委員はセンター長が委嘱する。

- (1) 学識経験者 3名以内
 - (2) 一般都民を代表する有識者又は老年学に造詣が深い者 1名以内
 - (3) 行政関係者 1名以内
- 2 各委員会は、それぞれの委員の過半数の出席により成立する。
- 3 委員長は、必要と認めるときは関係者に委員会への出席を求めることができる。
- 4 委員長は、必要と認めるときに部会を設けることができる。部会長は委員の中から委員長が指名するものとする。

(評価項目及び評価視点)

第5条 評価項目及び評価視点はおおむね次のとおりとする。

- (1) 研究計画の独創性・妥当性（研究内容の独創性・新規性・必要性、病院や他チームとの連携など総合力）
- (2) 研究成果（目標の達成度、学術的な知見、成果の発表）
- (3) 研究成果の還元（行政施策・地域・産業への反映、提言、審議会への参画）
- (4) 今後の展開と発展性（中期計画達成に向けた研究の方向性や内容、研究継続の方向性・必要性・妥当性・発展性）

(公開)

第6条 委員会及び委員会に係る資料、要点記録（以下「資料等」という。）は公開する。

ただし、委員長あるいは委員の発議により、出席委員の過半数で決議したときは、委員会又は資料等を公開しないことができる。

2 委員会及び資料等を公開するときは、委員長は、必要な条件を付することができる。

(評価結果の公表及び開示)

第7条 センター長は、評価結果の概要を公表する。

2 センター長は、研究チームの代表者から求めがあった場合、研究チームの代表者に、当該研究チームの行う研究に係る評価結果を開示することができる。ただし、委員会で決議のあった事項については、開示しないことができる。

(庶務)

第8条 委員会の庶務は、経営企画局事業推進課において処理する。

(雑則)

第9条 この要綱に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は理事長が定める。また、委員会の運営に必要な事項は委員長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成22年12月24日から施行する。

東京都健康長寿医療センター研究所外部評価委員会実施要領

22健事第1174号
平成22年12月24日制定

(目的)

第1 この要領は、東京都健康長寿医療センター研究所（以下、「研究所」という。）外部評価委員会設置要綱の規定に基づき、研究の外部評価の実施について必要な事項を定めることを目的とする。

(評価の対象)

第2 研究評価は、研究所で行われるチーム研究・受託・共同研究等による研究を対象とする。

(評価の実施)

第3 研究評価は、原則として、毎年度実施するものとする。

(評価委員及び評価の方法)

- 第4 研究評価は、次の方法により行う。
 - 2 評価は、外部評価委員会の委員により、研究報告書等により行う。
 - 3 評価の実施にあたり、外部評価委員会は研究に関するプレゼンテーションを研究部長等に行わせることができる。
 - 4 当分の間は、研究進行管理報告会も併せて行うこととし、理事長、センター長、経営企画局長、副所長等を参画させることができる。

(評価基準)

第5 研究評価の評価基準は、評価項目ごとに別に定める。

(評価結果の活用)

第6 センター長は、研究評価の結果を主に次により活用する。

- (1) 研究チーム・テーマの再編
- (2) 研究目的、研究計画、研究体制などの設定
- (3) 研究資源の配分
- (4) 研究所のビジョンや重点研究、プロジェクト研究の再構築

(雑則)

第7 この要領に定めるもののほか、外部評価の実施に必要な事項は、研究推進会議の議を経て、センター長が定める。

附 則

この要領は、平成22年12月24日から施行する。